

## 9 驚愕?! 事実 (先進事例) は、ここまで来ている?! ただ、惜しむらくは…??

堂本 彰夫

(1) 気がつけば、こんなことまで実現している?! やはり、これは、「必然?」なのか?!

先号(8)では、「最後のあがき? 否、新たな可能性の追求? 『教育協働セミナー』の次なる形は?!」ということで、私自身にとっては、かなり微妙な? 論稿をアップしていたが、ここに来て、少しだけ? 心境が変わってきたようにも思える(希望がある?)?! と言うのも、最近ではほとんど馴染みとなっている? ネット情報からではあるが、そこで、有意義、かつ、驚くべき? 考え方や取り組みに出くわしたからである?! 記事自体(対談記事)は、多少(かなり?) 商業主義に乗っかっているようにも見えるが、それらは、どうしてもここで取り上げるべき内容であり、そして、まさに、そこから、「気がつけば、こんなことまで実現している?! やはり、これは、『必然?』なのか?!」、そういうことを伝えたいのである?!

そこで、まずは、その対談記事であるが、それは、教育ジャーナリストのおおたとしまさ(太田敏正?)さんと、以前ここでも紹介した(→「(旧)教育協働への道」34)、教育学(哲学)者の苦野一徳さん(熊本大学准教授とのものであった。5回に亘る対談記事であったが(第1回「良い教育とは何か?」、第2回「学校でのお手紙禁止? よい学校とそうでない学校の『明らかな差』」、第3回「『不登校』という概念を無くすために必要な『多様でごちゃまぜの学び舎』」、第4回「『地域での教育』が育むもの」、第5回「エビデンスを重視する教育データ活用についての注意点」というようなことであった?!)、個人的には、もちろん第3回と第4回が、大いに注目された!

すなわち、そこでは、「学びの機会・場のネットワーク→ラーニングセンター」というようなキーワードがあり、「異文化、異世代がごちゃまぜになりながら学び合える公立学校→『多様』なごちゃまぜの場の必要性」「『地域』というキーワードは、今後いっそう意識したほうがいい」「かつては地域コミュニティで普通にあった出会いの場を、今は人為的につくる必要がある。そのための最高の『ハブ(拠点)』が学校。結局、地域づくりと学校づくりは、必ずセットでやるべき営みだ」、というような文言もあった! まさに、それは、私が長年提唱してきた「地域教育経営→教育協働」のコンセプトそのものではないか?!

その中で、「経済格差が教育格差に直結する→誰もが多様な教育機会にアクセスできる必要がある」「自由になるための力を育むための教育とはどういうことなのか、よい学校とはどういうものなのか…公教育こそ、改めて、この最上位の目的(「自由」と「自由の相互承認」)を意識し直そう。この本質を見失ってしまったケースは、いまの学校には少なくない…お互いを監視して責め合う教室文化→相互不寛容を育む?! →頭ではわかっているけど、実際のクラス運営では別のことが優先? →トラブル回避とか、保護者からのクレームが来ないように?! 教員たちを委縮させてしまうほどの、教育現場に対する不寛容、厳しすぎる視線がある?! →だから対話が必要! 学校は、失敗を思い切り、安心してできる場である必要がある! 本来の教育とは真逆のことが、現場の学校にはある?! →先生自身の対話が必要である(→同僚性/対話型の研修の重要性)」etc.!

確か、このような物言いであったかと思うが、改めて、苦野氏による、「教育における大切な原理は、各人の『自由』と『自由の相互承認』、そして『一般福祉』。教育は、全ての人が自由に生きられる力を確実に育むためにある。…ここで言う自由とは、わがまま放題のことではなく、生きたいように生きられるということ、そして、自分が自由に生きるためには、他者の自由もまた承認し、尊重する必要がある。これが『自由の相互承認(→民主主義社会)』。…だから、教育の政策としては、『一般福祉』の原理が重要となる」ということも、ここで改めて、確認できたということでもある(『学問としての教育学』日本評論社)?!

(2) 「きっかけ」はどこからでも、何からでもよい! 問題は、そこに何を見出しているかである!

ということで、まさにそうであると、改めて大いに共感するものであるが、一方で、私が、今ここで何より評価したいのは、「地域や保護者もまた、学校づくりの担い手である!」ということで、福島県大熊町の「学び舎 ゆめの森」(「ごちゃまぜのラーニングセンター」)が、新たに紹介されているということである! これまでは、「学校という『箱』の中に子どもたちを入れ込むことで教育の機会均等を実現しようとしてきたけれど、それはもはや限界が来ている。だから、これからの教育行政は、オンラインも含め、すでに至るところに存在している学びのネットワークを、一般福祉にかなう仕方で再ネットワーク化すること(モザイク模様の学び環境: おおた)が重要な役割になってくる」。

そして、「適切にアクセスできるようにするためには、どういう教育の機会があるのかということをお教えしてくれる『コンシェルジュみたいな役割』(総合世話係?)が必要。今これだけ『学びの個別化・協働化・プロジェクト化の融合』とか、『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』と言っているのに、一斉授業をモデルにした研究をするのはやっぱりナンセンス」ということも! 震災からの復興、これは、ある意味

特別な事情からとも言えるが（もちろんこのことは、軽々には言えないが！）、要は、「きっかけ」はどこからでも、何からでもよいのである！問題は、そこに何を見出し、どういうことを実現しているのかである！

そこで、その「学び舎 ゆめの森」であるが（別途調べてみた！）、まず「認定こども園と義務教育学校、預かり保育、学童保育を一体にした施設」（保護者の皆さんが安心して子育てできる環境）で、「地域の中心として0歳から15歳の子どもたちが、共に学ぶ場所」（子どもたちがともに遊び、学び、さらに地域の方々とも協働していく学び舎／多様性に満ちた社会において、子どもたちが自分で考え、人と協力して生きていく力を育む）とある。そして、「『温故知新』誇りを持って、自分の未来を切り拓く」（**教育方針**）、「自分で学びをデザインできる多様性と混在が共にある、新しい教育空間」（**コンセプト**）が示されている。

具体的には、「三角形の組み合わせで生まれる自由につながる空間」（三角形の鉄骨のフレームを組み合わせた自由な形状の建物）、「図書ひろばを中心にした多様性と混在が共にある場所」（中心には吹き抜けの大きな開放的な図書ひろばがあり、子ども園、小学校、中学校、職員室、体育館、パレット（特別教室）を放射状に配置）、「自分で学びをデザインできるどこでも教室になる自由な学び場」（同じ大きさの部屋はない）、さらには、「デジタルとアナログ」（本に囲まれた空間で、デジタル教材の使用）、「遊びながら学ぶ学びながら遊ぶ」（五感を動かす様々な仕掛け）、「地域と共にシェアする0歳から100歳までの学び舎」（体育館、創作工房、図書ひろばなど→町の交流拠点）。そして、そこに、「学びの環境」（特徴的な形の、11のエリアによって構成される校舎）が出来上がっている！なお、この周辺は、震災後の「復興拠点」とされ、役場庁舎、交流施設／商業施設、公営住宅、宿泊温泉施設等が、まさに「まちづくりとひとづくり」の中心地（センター）を形成している！

**(3) ただ「残念？」なのは、そこに「社会教育（行政）」への言及がないこと?!それは、一体何故なのか？**

とは言え、やはりここで「残念？」なのは、そこに「社会教育（行政）」への言及がないこと、つまり、そこでの言質や取り組みに、これまでの隘路や不十分な点を、どのように受け止め、それを解決しようとしているのか（「社会教育（行政）」の存在意義や、これまでの実績を、正当に評価していない？→首長部局への権限移譲→教育委員会の衰退？）、理論的？に明示されていないということである?!言い換えれば、これまで声を大にして、社会教育側から、そして、「生涯教育／学習（論）」の立場から、そうした、学校と地域の協働（ある意味「再生？」）の必要性を説き、そのための理論構築（「地域教育経営論」）、そして、その具体的なシステムづくりの「見取り図？」（教育の三層構造図→ひとづくりとまちづくりの循環構造図）の提示を行ってきた（つもりの？）私からすれば、何とももどかしく（ある意味悔しくもある？）、やはりどうしても、ここではそのことに言及しなくてははいけないと思うのである！

もちろん、その原因は、「教育」と言えば、やはり「学校教育」のこと！「家庭教育」や「社会教育（ただし、これを、「地域教育」と、普通に表現する人も多い?）」のことも知ってはいるが、問題となっている「教育」というのは、この学校教育（直接的には子ども達の教育）のことであるという意識や行動が、ほとんどの関係者の間で、無前提に（あるいは無意識の内に？）なされているからであろう?!かなり辛辣に言えば、「社会教育」のことを、ほとんど知らない（否、知らないで過ごしている?）、あるいは、その存在意義や成果を軽く見ている（いわゆる「勉強」や進学・就職等には関係ない?）?!そういう現実（実態）があるということでもある（言いたくはないが、関係予算や要員の配置等の違いも!）?!ひいき目にみれば、かの「地域」という文言に、その「社会教育（行政）」のことも含まれているとも言えようが、これもまた、これまで何度も述べてきたように、ただ「地域」というだけでは、その「社会教育（行政）」の内容や存在価値は伝わらない?!

また、よく、「ひとづくりはまちづくり!まちづくりはひとづくり!」とは言われるが、それを、権限や守備範囲の話で終わらせてしまっている部分もある?!大切なのは、いかに、双方（の意義）を大切にしながら、互いの持てる力（or 成果）を生かし合えるかなのである!単なる「移行」や、一方への「統合」で済む話ではないのである!何が大切なのかを、真摯に考えていけば、どうしても、そういうことになるのである（それは、過去の大きい反省からではあるが、人間社会の英知、ある意味自然の摂理でもある?!）!今までは、私自身も、そのことは、あまり前面に出す必要はない?いつか、それぞれが、その存在意義や成果を感じて（見つけて）くれれば、それでよいと思っていた（その方が、より社会教育の特性（自主性／自発性）に合致している?）?!

だが、今や、気がつけば、「学校教育」のこと（だけ?）を論じていた関係者達が（今回の対談者達も含めて?）、実は、事実上は、「社会教育（行政）」のことまで論じている（あたかも新しい考え方、取り組みかのように?だが、それは、学校教育へのアンチ、否、カウンターヒーローにとどまっている?）?!もう、明らかであろう!そうした考え方、取り組みが、これから求められる課題対応（少子高齢化／地域活性・復興等）への大きな力となるが、同時に、そうしたことがいかに重要なのかということ、改めて、**かつ正当に?**主張・実践できる「ひと」が必要であるということである!それは、結局は、一人ひとりの自覚（実力）に依るということになるが、その福島県大熊町の取り組みは、そのことに、いかに応えていってくれるだろうか?!（つづく?）